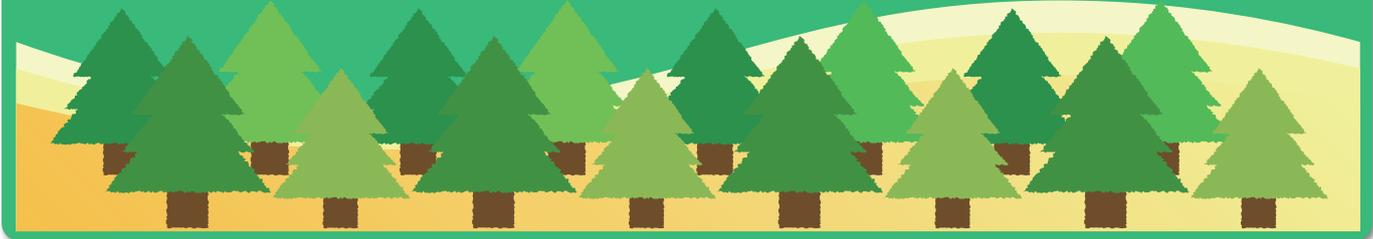


TOPICS 1

花粉発生源対策の推進に関する林野庁の取組 ～花粉の少ない森林づくりに向けて～



スギやヒノキは、通直に育ち、加工等がしやすいため、建築材や家具材などとして私たちの生活に幅広く利用されてきた樹種です。このため、古くから各地でスギやヒノキが植えられてきました。戦後の荒廃した国土の復旧や、高度経済成長期の旺盛な木材需要に応えるために植林が進められ、我が国の人工林は約1千万haとなりました。こうした人工林のおよそ7割をスギ・ヒノキ林が占めており、現在ではその半数以上が利用可能な時期を迎え、持続可能な資源としての活用が期待されています。

その一方で、春を迎えるこの時期からはスギ・ヒノキから飛散する花粉が、国民の約4割が罹患しているとも言われる花粉症の原因の一つとなっています。花粉症対策については、国の関係省庁が連携して、スギ・ヒノキ林の花粉発生源対策、花粉症の原因の解明や治療法等の研究の推進、花粉量の予測・観測などを進めています。

林野庁では花粉発生源対策を推進しており、花粉発生源

林野庁の花粉発生源対策「3本の斧」

第一の“斧” 伐って利用します

花粉を大量に飛散させるスギ人工林等を伐採・利用します。

花粉を大量に飛散させるスギ・ヒノキ人工林の伐採を進めます。また、伐採された木材については、住宅に加えて、公共施設や商業施設の木造化等に利用し、資源として活かしていきます。



花粉発生源である立木の伐倒・搬出



伐採された木材の利用拡大

第二の“斧” 植え替えます

花粉の少ない苗木等による植替や広葉樹の導入を進めます。

花粉症対策に資する苗木の生産増大に最優先で取り組み、スギ・ヒノキの伐採跡地への植栽を促進します。また、条件不利地においては、伐採後の広葉樹の導入を進めます。



少花粉スギ苗木等の生産体制を強化

第三の“斧” 出させません

スギ花粉の発生を抑える技術の実用化を図ります。

スギ花粉の飛散防止剤の開発・普及等、スギ花粉の発生を抑え飛散させない技術の実用化を図ります。



花粉飛散防止剤により枯死した雄花

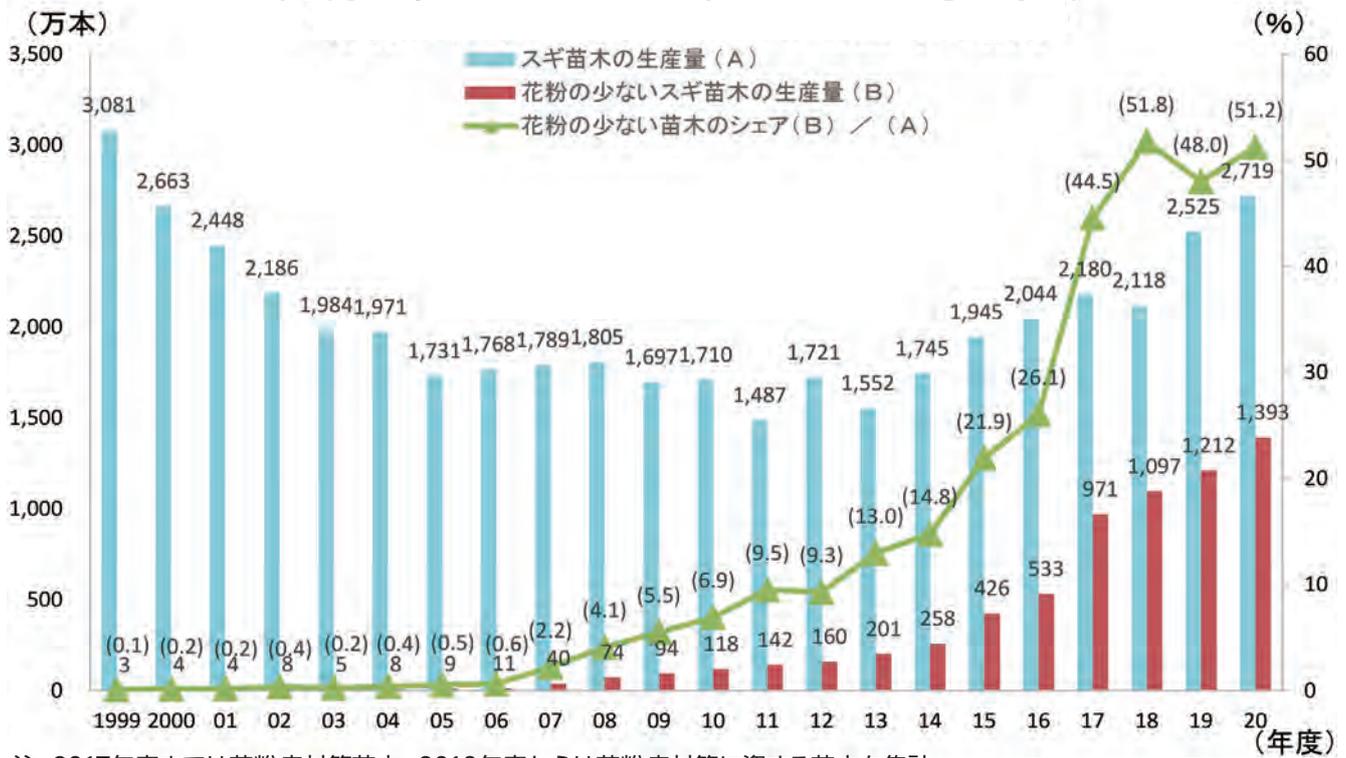


を断ち切る「3本の斧」として、
 ①花粉を大量に飛散させるスギ・ヒノキ林の伐採・利用、
 ②花粉の少ないスギやヒノキの苗木による植替えや広葉樹の導入などにより、花粉の少ない森林への転換を進めるとともに、③スギ花粉の飛散を防止する技術の実用化に向けた取組などを支援しています。

このうち花粉の少ないスギについては、花粉を全く発生させない品種の開発や、花粉量が通常の半分程度で成長が良い苗木の開発が進められてきており、近年ではこれらの品種の生産が大幅に伸びてきています。これらの花粉の少ない苗木の生産量は、2018年度には1千万本を越え、スギ苗木全体の約5割となっており、2023年度には、スギ苗木全体の約7割となる見込みです。

林野庁では、利用期を迎えたスギ・ヒノキ林の循環利用を確立し、森林・林業・木材産業によるグリーン成長と森林資源の適切な管理の実現を通じて、引き続き花粉発生源対策を進めていくこととしています。

花粉の少ないスギ苗木の生産量等の推移



注：2017年度までは花粉症対策苗木、2018年度からは花粉症対策に資する苗木を集計

出典：林野庁業務資料

【スギ・ヒノキ花粉削減対策シンポジウム2022】



林野庁では毎年、最新の花粉発生源対策の取組や花粉予測などを紹介するシンポジウムを開催しています。今年度は12月17日に千葉県において開催し、約1,000名の方にご参加いただきました。

シンポジウムでは、林野庁の花粉発生源対策や千葉県の花粉の少ないスギやヒノキの苗木の開発等の取組、花粉症対策品種の紹介、花粉と気候の関係、花粉症の治療法などについて講演を行いました。会場からは近隣のスギ林への対応や、花粉症治療にかかる具体的な質問などがありました。また、会場では空気清浄機やマスクなどの花粉対策製品の展示も行われました。